しれとこの森通信

2013/No.16

100平方メートル運動の森・トラスト

2008～2012年の森づくり
「第3次回帰作業結果報告号」

強風で折れたハルニレの巨木と森の番人。
このハルニレのコード番号は"A6382"。
2000年、シカに樹皮を食べられないように金網を巻いた木でした。それから11年後の2011年、春の大風によってその幹は折れました。
地面に落ちた幹は、やがて虫や動物たちの棲みかとなり、そして小さな木々たちの苗床となっていきます。
森の中に命の循環があるように、人も次の世代のために知床の森と運動を守り育て、そして伝えていきます。

この用紙は環境保全（資源活用）のため
古紙配合紙を使用しています。

NATIONAL TRUST
知床で夢を育てませんか!
いのちあふれる森を次の世代へ

「しれとこで夢を買いませんか！」の呼びかけから35年、運動地での本格的な森づくりの開始から15年が経過しました。この間、運動地を含む一帯が世界自然遺産に登録され、2010年には長年の目標であったすべての保全対象地の取得を完了することができました。これもひとえに運動参加者の皆さまのご支援の賜であり、心から感謝いたします。

5年で一巡する運動地の森づくり作業は今年から4巡目に入ります。100年、200年先の大きな夢の実現に向けて、これからも時代の潮流に流されることなく、着実にその歩みを進めてまいりますので、引き続き、あたたかいご支援をお願い申し上げます。

斜里町長 馬場　隆

知床連山から吹き下ろす強い風と雪を受け止める防風柵。風に叩かれ、苗木がなかなか育たない場所に防風柵を設置する。積雪期、防風柵の前後にできる雪の吹きだまりが「ふとん」となって、苗木は、厳しい風雪から守られる。
ここに木々が育つことで、それが自然の防風林となり風を受け止めていく。そんな未来の森の第一歩を踏み出す手助けを森づくりでは行っている。

しれとこ100平方メートル運動の35年間

1977年（昭和52年）	「しれとこ100平方メートル運動」の提唱・開始（3月） 開拓跡地の買い取りを開始
1979年（昭和54年）	運動推進本部・関東支部発足
1980年（昭和55年）	関西支部発足
1982年（昭和57年）	運動5周年シンポジウムを開催
1987年（昭和62年）	林野庁が隣接する国有林を伐採 100平方メートル運動ハウス開館（5月）
1988年（昭和63年）	運動10周年シンポジウムを開催
1997年（平成9年）	新たな展開「100平方メートル運動の森・トラスト」のスタート 森の生態系を再生する作業を本格的に開始（6月） 運動20周年シンポジウムを開催
2002年（平成14年）	運動地を一巡した第1次回帰作業が完了
2003年（平成15年）	第2次回帰作業の開始
2005年（平成17年）	知床が世界自然遺産に登録（7月）
2007年（平成19年）	「しれとこ100平方メートル運動」の提唱・開始から30年が経過 運動30周年記念事業を実施 第2次回帰作業が完了
2008年（平成20年）	第3次回帰作業の開始
2010年（平成22年）	保全対象地を全て取得（11月）
2012年（平成24年）	第3次回帰作業が完了 運動35周年記念事業を実施
2013年（平成25年）	第4次回帰作業の開始

知床連山のふもとに広がる約860ヘクタールの運動地。ここでは、5つに分けられた区画を1年に1区画ずつ、5年でひと回りする回帰作業方式で森づくりを行っています。

2012年、3度目の回帰作業が完了しました。今回の「しれとこの森通信」は、5年に1回の森づくりの報告号として、1977年からのすべての100平方メートル運動参加者の皆さまへお送りしています。

「第3次回帰作業結果報告」
2008～2012年の運動の取り組み

知床の開拓跡地に、かつてあった本来の森と生き物たちの営みを取り戻すために森づくりを進めています。そして、運動と森づくりを多くの人に伝えていくことも大きな柱として取り組んでいます。
数百年先の未来の森を見すえた取り組みの5年間を振り返ります。

写真／大型苗の移植作業。森づくりのひとつの手法として、苗畑で育成した大きな木を、運動地の各所へと植え込んでいる。

写真上／苗木を育成している苗畑の様子。夏場の草取りは欠かかせない。現在は、大型苗の育成に力を入れている。
写真左／森づくり初期の頃の苗畑の様子（2002年）。

写真右／植樹用の苗木。これまではこのサイズを中心に植え込んできた。
写真左／防鹿柵の一歩外では、多くのシカが暮らしている。

第3次回帰作業　2008〜2012年

森づくり作業の5年間

運動地で本格的な森づくりを始めてから15年、高密度に生息するエゾシカの存在など多くの課題と向き合いながら、かつてここにあった本来の森の再生に向けた作業を進めています。

苗木を育てる、植える

第3次回帰作業の5年間で、苗畑で育てたオヒョウやハルニレなどの広葉樹を中心とした苗木21種1470本を運動地各地の防鹿柵の中などに植え込みました。これで森づくりの15年間で植え込んだ苗木は、約1万2000本となっています。

ただし、この5年間の植樹のペースは、その前の10年間に比べると大きく落ちてます。それには、理由があり、これまで中心的な作業として進めてきた人の手で持てるサイズの苗木の植樹とは別に、樹高6〜10メートルクラスの「大きな木」の育成と移植を行っているからです。

防鹿柵の「限界」

苗木を育て、植えるという作業は、原生の森の再生を目指すうえで、重要な手法のひとつです。しかし、この手法を含め、他のどんな作業を進めるにしても、知床の森づくりは、必ず向き合わなければならない大きな課題を抱えています。その課題とは、知床半島に多く生息する「エゾシカ」です。

現在、運動地の中で広葉樹の苗木を育てることができるのは、高さ2・5メートル以上のフェンスで囲われた防鹿柵の中だけとなっています。なぜなら、もし、柵で囲っていない場所に木を植えてもいずれシカに食べられてしまうからです。そのため、知床の森づくりでは、合計18基の防鹿柵を設置しています。

物理的にシカの侵入を防ぐ防鹿柵は、苗木を育て植える場所として、また、もともとある自然の森を守る場所として確実にその効果を上げています。

「防鹿柵」は、森づくりにとって有効な手法ですが、将来的な補修や改修のコストを考えると、柵を設置し続けることには限界が見え始めてきています。また、これまで毎年、それぞれの柵の中に多くの苗木を植え込んできた結果、どの柵の中も植えた苗木や自然に生えてきた木々でほぼ「いっぱい」となっています。そのため、今後、新たに苗木を植樹できる場所が残りわずかとなっていることも課題となっています。

柵に頼らない森づくりへ

そこで、この数年間は、柵に頼らない森づくりの手法として、大きな木（以下、大型苗）を「柵のない場所」に移植する作業を並行して進め、成果をあげています。具体的には、それぞれの木を柵の中で樹高6メートル以上にまで育て、その幹に樹皮保護ネット（シカに樹皮を食べられないように木を守るネット）を巻いて、柵のない場所に移植するという手法です。木を6メートル以上の樹高まで育てなければならないのは、その高さにな

写真右上／大型苗の掘り取り作業。根周りの土を落とさないように、慎重に掘り上げる。　写真左／掘り取った大型苗をアカエゾマツ植林地に植え込む。　写真右下／針葉樹の植林地にできた広葉樹の小さな「森」。植え込んだ木々は、しっかりと根付き、その葉を広げている。

らないと樹皮保護ネットを巻くことができないからです。

これまで、この手法を用いて、ミズナラなどの広葉樹13種１４０本の大型苗の移植を行いました。大型苗をまとめて一ヶ所に植え込むことで、数日の間に小さな「森」が立ちあがります。

針広混交林の形成に向けて

大型苗を移植する目的には、「柵に頼らない」ことの他に、いくつかの役割があります。そのひとつが、知床本来の森の構成である針広混交林（針葉樹と広葉樹の入り混じった森）の形成に向けた森づくりです。運動地には、運動開始当初から植えられてきたアカエゾマツを中心とした広大な針葉樹の植林地が広がっています。現在進めている森づくりでは、それらの針葉樹の森の中に、広葉樹を入れ込み、将来的には本来ここにあった針広混交林へと樹種を転換していくことも大きな目標として掲げています。

その目標の森への第一歩として、アカエゾマツなどの針葉樹の植林地の一部を切り開いて作った「穴地」の中に、広葉樹の大型苗を移植していく作業を進めています。

試行錯誤を重ねて

大型苗を移植する手法も利点だけではありません。木が大きくなれば必然的にその重量も重くなり、場合によっては、クレーンなどの重機も必要になることもあります。同時に、掘り取りや植え込みも大きな穴を掘る大がかりな作業となり、一度に何本もの本数を移植することができません。また、樹皮保護ネットも数年ごとには交換をする必要があるため、本数が増えるほど将来的な維持管理のコストが増していくことも課題のひとつです。

これからの森づくり

これまで、大型苗の移植作業を実践してきた結果、いくつかの課題とともに、今後、柵に頼らずに森づくりを進めていく手法として有効であることが見えてきました。もちろん、この手法のみで森づくりが完結するわけではなく、数百年先の未来の森を見据えた取り組みの第一歩にしか過ぎません。運動地を取り巻くシカの状況も刻々と変化してきています。しかし、この取り組みが礎になってくれることを願い、これからも試行錯誤を重ねながら森づくりを進めていきます。

森の変化を知る、記録する

運動の森づくりでは、木を守り、育て植えるだけではなく、作業結果を記録し、評価するためのモニタリング（調査）も行っています。例えば、防鹿柵を設置した場合は、柵の効果の検証を目的に、柵の内外の樹木や草本の調査を行っています。

また、植物の調査だけではなく、毎年冬の積雪を定点で計測したり、日々の作業の際も可能な限り写真撮影を行うなど、運動地と森づくりの状況を記録しています。

このように作業や目的ごとに調査や記録を行い、ひとつひとつの作業の方向性を確かめながら、自然に対し常に謙虚な姿勢で森づくりを進めています。

林床の植物を調べる調査の様子。識別・記録・計測などそれぞれの役割に分かれ、効率的に進めていく。

◇モニタリング結果「シカ採食圧調査」

調査地：第5区画「2006年設置防鹿柵」内外
調査年：2007年及び2012年（5年毎）

調査方法：
柵内（調査区）及び柵外（調査区）にそれぞれ6カ所設置した半径3mの円形プロットの1/4の区画で、高さ130㎝以下の草本と木本全ての樹種及び本数を記録します。

2006年に設置した防鹿柵の内外で、5年ごとに柵の効果を検証するための林床調査を行っています。柵の中（調査区）だけではなく、外側（対照区）でも同じ調査を行うのは、シカが入ることができない柵内と、柵外の比較をすることで、シカの採食圧の影響を見るためです。

調査の結果、冬にシカの重要な餌となっているササが柵内で著しく増加していることが分かりました。その他の草本も柵内では種類や本数が増える傾向が見られます。樹木については、この5年間ではまだ明確な回復の効果は現れていません。さらに長い期間にわたって変化を確認していく必要があります。

エゾシカと森づくり

運動地でのシカの捕獲が始まっています。

写真上／「流し猟式シャープシューティング」。警戒心を高めるシカが発生しないよう、一度に群れの全頭を捕獲する手法。具体的には、単独または少数の群れのみを狙撃し、捕獲を行う。
写真下／「囲いわな」。自動落下式ゲートを備えた囲い柵の中に、餌でシカをおびき寄せて捕獲する手法。

新たな局面を迎えたシカ対策

森づくりの現場は、日々エゾシカとの戦いです。過去の作業の大半はシカ対策に追われていたと言っても過言ではありません。そんな中、この5年間の中で、運動のシカ対策にも係わる大きな動きがありました。2012年から、運動地でもシカの捕獲が始まっているのです。

これまでも本誌にて経緯をお伝えしてきましたが、知床世界遺産地域の「エゾシカ保護管理計画」では、運動地を含む幌別・岩尾別地区も、シカの個体数調整（シカの数を適正な生息数とするため間引くこと）の実施候補地として挙げられていました。候補地となった理由は、運動地とその周辺は、世界遺産地域の中でも、シカにとって特に暮らしやすい環境のため、多数のシカが生息しているからです。また、ここでのシカの捕獲は、知床の他の地域へ及ぼす影響を緩和させるためにも必要とされています。

そして、2012年1月より、環境省の事業として試験的なシカの捕獲が始まり、「囲いわな」「くくりわな」「流し猟式シャープシューティング」の3つの手法が用いられ、2013年度3月までに計849頭のシカが捕獲されています。

一口に「捕獲」と言っても、その作業は容易なものではありません。実際の捕獲は、シカが越冬のため集まる冬場を中心に行われています。日々のわなの巡回や定期的なシャープシューティングの実施、そして、捕獲があった場合は、そのシカの搬出など、厳冬の知床で、捕獲の努力が続けられました。

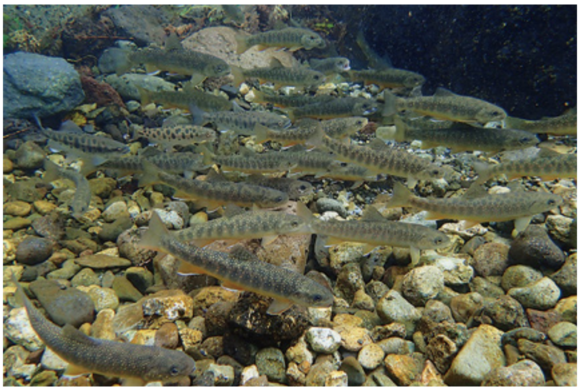
今後は、これらの結果を受け、世界遺産管理のワーキンググループの中で、植生の回復状況の確認などが行われ、捕獲の効果検証が進められていくことになっています。

運動地のシカ対策は、新たな局面を迎えています。確かに、以前に比べると、場所によってはシカの姿を見ることも少なくなりました。また、道路脇の草花にも変化の兆しが現れ始めてきています。

運動では、これまでもシカに関する中期方針を見直すなど、より効果的に森づくりを進めていくための対応を行ってきましたが、今後も、シカの動向と個体数調整事業の推移を注視しつつ、状況に合わせたシカ対策、そして森づくりを行っていきます。

防鹿柵内の草本群落。今は、柵の中でしか目にすることができないが、シカの捕獲をすることで、この風景が柵外でも広がることを期待している。

岩尾別川に戻ってきたサクラマス（メス）。海へと下ったサクラマス（降海型のヤマメ）は、大きくなって数年後にまた元の川に戻ってくる。



岩尾別川の淵を泳ぐオショロコマとヤマメ。「ヤマメ」とは、海へは下らず、一生を川で過ごす河川残留型のサクラマスの呼称。

第3次回帰作業　2008～2012年

生物相復元の5年間

生物相復元の第一弾として、運動地を流れる川にかつて棲んでいたサクラマスをよみがえらせる取り組みを行っています。

当初は、サクラマス復元の兆し見られず

サクラマスの復元に向け、1999～2001年にかけて運動地を流れるふたつの川に卵や稚魚の放流を行いました。しかし、その後の調査では、いったん海へと下り、再び川に戻ってきたサクラマスの数は、多くても十数匹という結果しか得ることができませんでした。サクラマス復活に至らなかった理由として、海での減少や河川環境の悪化、ダムなどの工作物によって遡上が妨げられ、産卵環境が狭められていることなどが挙げられていました。

岩尾別川の河川環境改善に向けた取り組み

サクラマスの復元に向けた取り組みを始めてから15年、この間、川を取り巻く状況は、少しずつ改善の方向へ進んでいます。この運動からもダムなどを管理する関係諸官庁への働きかけを続けてきたほか、知床が世界自然遺産に登録された2005年を契機に、運動地内を流れる岩尾別川の数基のダムが改修され、魚が上流へと遡上できる状況が生まれ始めてきています。

この状況を受け、2008年よりサクラマスの復元に向けた取り組みを再開し、この5年間で岩尾別川に合計70万粒の卵の放流を行いました。

この結果、最初の放流後、一時はほぼ途絶えていたサクラマスの遡上も、放流再開後は、まだその数は少ないものの再び川にサクラマスが帰ってくるようになっています。

また、岩尾別川の河口にある岩尾別ふ化場（一般社団法人北見管内さけ・ます増殖事業協会）の取り組みとして、シロザケやカラフトマスが上流へと遡上できるよう、捕獲施設の開放も毎年継続して行われています。少しずつ、サクラマスを含む多くの魚にとって棲みやすい川が戻り始めようとしています。

写真左／改修前の岩尾別川支流赤イ川の鋼製ダム。　写真右／2010年、スリット（切り込み）が施され、上流へ魚の遡上が可能となった。

「カツラの森、命あふれる川の復元事業」

かつての豊かな森と川の復元へ

２０１１年、岩尾別川とその周辺の自然を再生する取り組みが、「カツラの森、命あふれる川の復元事業」として新たな一歩を踏み出しました。この事業は、これまで以上に岩尾別川の河畔林と河川環境の復元を進めていくものです。

２０１５年までの５カ年計画で、数基の防鹿柵を設置し、かつて河畔を覆っていたカツラなどの木々を育て、森そのものを再生します。また、人為的に単純化された川の構造を自然な流れに復元し、多くの生き物が暮らす本来の岩尾別川の姿を取り戻すことも目指しています。

河畔林を守る防鹿柵を設置

まずは、最初の２年間をかけて、川沿いに残る河畔林をシカから守るため、その一部を囲う防鹿柵を設置しました。面積は、約１・５ヘクタール、柵の総延長は５４０メートルです。今後は、シカの影響で河畔林が回復しない状況となっている河原に防鹿柵を設置する予定です。

カツラの苗を育てる

カツラは、沢沿いや湿地に生える落葉樹です。この取り組みでは、豊かな河畔林の象徴としてカツラを掲げ、森と川の復元を進めています。現在、苗畑では、約３００本のカツラの苗木を育成しています。これらの苗木は、今後設置する防鹿柵の中に植え込んでいく計画です。

川の中の自然の復元

一見すると、岩尾別川は自然のままの流れにも見えますが、実は防災上の理由で、河川が直線化されるなど人の手が入っています。遺産登録を契機に、数基のダムが改修されるなど、河川全体の環境改善が進んできていることから、この取り組みでは、それをさらに促進するために、川の中に大きな石を配置して瀬や淵をつくり、オショロコマやヤマメなどの魚の棲みかと、サケやマスの産卵環境の改善を図る作業も進めています。

写真上／改修前の岩尾別川。 写真下／2012年、魚の環境改善を目的に、岩石を配置し、瀬と淵の形成を行った。

河畔にて採取したカツラの稚樹を苗畑に植え込んだ。この作業は、ダイキン工業の社員ボランティアにお手伝いいただいた。

「カツラの森、命あふれる川の復元事業」は、環境貢献活動に取り組んでいるダイキン工業株式会社（本社大阪）からの支援を受けて実施しています。詳しくは下記ホームページをご覧ください。

ダイキン工業「知床の自然環境保全」
http://www.daikin.co.jp/csr/shiretoko/index.html

第3次回帰作業　2008～2012年

交流事業の5年間

運動参加者の皆さんに、運動と森づくりを伝えるため、
毎年「しれとこの森交流事業」を開催しています。

「知床自然教室」知床の森で暮らす

毎年夏、子どもたちが知床の森で一週間を過ごします。地元斜里町、そして全国から子どもたちがこの森に集まり、知床の自然の中で暮らします。

キャンプ中は、電気やガス、水道など普段の生活で当たり前に使っているものは何もありません。それでも、みんなで力を合わせれば生きていけることを知り、そして、自然の中で生きることの厳しさも学んでいきます。

この5年間で、のべ197人の子どもたちがこの森で思い出の夏を過ごしました。30年以上続く知床自然教室には、かつての参加者の子どもの世代が参加するようになっています。

「しれとこ森の集い」知床の森がにぎわう

毎年10月、たくさんの運動参加者と地元の町民にお集まりいただき、「しれとこ森の集い」を開催しています。午前中は、森の番人と歩く散策やネイチャーゲーム、午後は植樹祭を行っています。

この5年間で、のべ564人の皆さんが参加し、苗畑で育てたハルニレなどの苗木1047本を植えていただきました。「森の集い」は、皆さんに知床の森づくりを知っていただくだけではなく、数百本単位で苗木を植えるという作業面でも多大な貢献をしていただいています。

「森づくりワークキャンプ」知床の森で働く

毎年秋に開催している「森づくりワークキャンプ」では、全国各地から集結した十数名が、5泊6日の日程で森づくりの作業に汗を流します。苗木の移植や防鹿柵の設置や補修、森の番人の指導のもと、いくつもの作業をこなしていきます。

この5年間で、のべ70人の皆さんがワークキャンプに参加しました。参加者の方も様々で、初参加の方から10年以上続けて参加している方もいらっしゃいます。ボランティアの皆さんの力は森づくりに欠かせないものとなっています。

＊今年の各イベントの募集情報は、裏表紙のカレンダーをご参照ください。

写真上／自然教室。毎日の食事も自分たちで作る。　写真中／森の集い。毎年100名前後の皆さんがたくさんの苗木を植える。　写真下／ワークキャンプ。大型苗の移植もてきぱきとこなしていく。

「知床自然教室への想い」
知床自然教室元参加者　國廣　美樹さん

くにひろ　みき／東京都在住。3人の姉も自然教室参加者。現在の社会人リーダーとして自然教室に毎年参加している。上記写真は、自然教室の子どもたちと國廣さん(中央)。

最近、知床自然教室での体験が今の私を支えていると感じることが多々ある。

それは屋外で作業している時の急な雨に対する反応の早さや服や体が汚れる事への抵抗の低さ、予期せぬ混乱状況の中でも早く前向き思考に切り替え、取りあえず、「食べる」「寝る」を確保できることなど。そして、最も大きな影響は「『大嫌い』な事が『大好き』に変わること」が有り得るということを身をもって知ったことだろう。

100平方メートル運動の提唱者、故藤谷元斜里町長を敬愛した伯父の影響で、我が家では知床自然教室が始まった1980年から強制的に子供達は知床へ送り込まれる事になった。姉達は大変楽しんで参加していたが、私は汚れることや虫が大嫌いで小学4年から6年までの3年間の自然教室は、ただ苦痛としか言いようがなかった。中学になると私にも選択権が与えられ、ようやく自然教室から開放され平和な夏休みを過ごすことができるようになった。

高校生になったある日、学生リーダーとして自然教室に参加し続けていた姉から「美樹はもう行かないの？楽しいよ？」と聞かれた。はじめは「もうコリゴリです」と思ったが日が経つにつれ「もう1回だけ行ってみようか？」と思い始め、何だかんだと気が付けば申し込みを済ませていた。4年ぶりの自然教室は信じられないほど楽しかった！体が大きくなり皆についていくことができたし、装備も自分に合ったものを揃えられ、快適な野外生活を送ることができた。小学生の頃の「辛かった」事は自然教室の「魅力」に変わった。結局、短大の2年間も学生リーダーとして参加した。

そして5年前の2008年、13年ぶりに社会人リーダーとして復活。そこで学生の頃は分からなかった引率者の熱い想いや、知床自然教室の意味、貴重さなどを改めて知った。今、私は、子供達に２つのことを伝えたいと思っている。一つは、「嫌い」は一生「嫌い」ではない。子供の頃のほんの小さなつまづきで、自分で自分を決めつけないで欲しいということ。二つめは「熱」を伝えること。なぜなら100平方メートル運動はそれを構想し、実現した人たちの想い、更にはその想いに共鳴し運動に参加した人たちの想い＝「熱」そのものだから。小さな頃に出会った大人たちの「熱」は私の中で灯り続け、原動力になっている事を私自身がよく知っているから。今年ももうすぐ夏が来る。

第3次回帰作業　2008～2012年

運動地公開の5年間

この運動では、「運動地の適正な公開と保全のシステムを構築」を目標に掲げ、運動と森づくりをより多くの皆さんに知っていただくための取り組みを進めています。

「知床森づくりの日・夏」にご参加の皆さん。苗畑の草取りを終えて集合写真。森づくりだけではなく、宿舎での共同生活も楽しみのひとつです。

「知床森づくりの日」

２０１０年から、「森づくりワークキャンプ」の発展版として、「知床森づくりの日」と題し、春夏秋の年３回、４泊５日の森づくり合宿を開催しています。これまで計８回開催し、のべ66名の皆さんにご参加いただきました。初めて参加した方からは、「森づくりに貢献できて良かった。また来たい。」という感想をいただいており、何名かはリピーターとして再訪していただいています。森づくりを通して、新たな運動の輪が広がっています。

「学校・企業向けプログラム」

運動地公開の取り組みでは、運動の趣旨に賛同していただける学校や企業、団体などの受け入れを行っています。

この５年間で、地元の斜里高校や自然愛護少年団、遠くは東京都立南多摩中等教育学校などの子どもたち、のべ６７２名が運動地を訪れ、知床の自然と森づくりを体験していきました。また、企業・団体関係では、ダイキン工業や日本植木協会青年部の皆さんなど、のべ１９３名が、運動地を歩き、森づくりに汗を流しました。

「スノーシュー・歩くスキーコース」

冬季の運動地公開として、知床自然センター周辺の運動地に、スノーシュー（かんじき）やスキーで歩く散策コースを設置しています。コース周辺には、森づくりの作業地だけではなく、開拓当時の家屋などもあり、コースを利用する皆さんには、案内地図をお渡ししています。冬の運動地を歩きながら、知床の歴史と森づくりを知っていただく取り組みです。毎年１～３月の開設中、年間１００組前後の皆さんが利用しています。

写真上／運動の解説を聞く中学生。
写真下／冬の運動地。後ろは開拓小屋。

小さな町の大きな挑戦

「しれとこ100平方メートル運動35周年事業」を開催

2012年9～10月　斜里町公民館ゆめホール知床他

2012年、しれとこ100平方メートル運動は、35周年を迎えました。1977年に始まったこの運動は、知床の自然保護に貢献するだけではなく、日本のナショナル・トラスト運動の先駆けとしても大きな役割を果たしています。

2012年9月から10月、35周年を記念して「運動の歩みパネル展」や「記念講演会」を開催し、パネル展には、6,500名近くの皆さんにお越しいただいたほか、記念講演会にも多くの方にご参加いただきました。なお、同年の「しれとこ森の集い」は、35周年記念イベントとして実施しています。

「運動の歩みパネル展」
9/20～10/16、ゆめホール知床にて開催。運動と森づくりの歴史を振り返った。

「記念講演会」
10/13、知床世界遺産センターにて開催。前環境省自然環境局長の渡辺綱男氏（写真右）による記念講演と元副町長の関根郁雄氏（現知床財団理事長）による運動報告。

100平方メートル運動地取得完了

2010年、保全対象地のすべてを取得しました！

現在の運動地の様子（2009年撮影）。黄色い囲みが2010年に取得した土地。

33年目の目標達成

この5年間の大きなトピックスとして、100平方メートル運動の土地の買い取りが完了したことが挙げられます。

2010年11月、「しれとこ100平方メートル運動」の保全（買い取り）対象地として最後まで残されていた11・92ヘクタールの開拓跡地を取得しました。1977年の運動開始から33年間という歳月と多くの方々のご支援を受け、この度、目標としていたすべての保全対象地の取得を完了することができたのです。

しれとこで夢を買いませんか

現在の運動地、知床国立公園内の幌別・岩尾別地区では、大正から戦後にかけて幾度かの開拓が行われました。そして、多くの人々が農業や酪農を中心とした生活を営んでいましたが、厳しい自然環境や開拓政策、社会状況の変化などにより、1970年代までに、ここに暮らしていた人々は、次々とこの地を離れました。そして、当時日本各地で起こっていたリゾート開発や土地投機のブームの波は知床にも押し寄せ、幌別・岩尾別の開拓跡地も乱開発の危機にさらされ始めたのです。そんな時代背景の中、開拓跡地の保全の方法に頭を悩ませていた当時の故藤谷斜里町長は、イギリスのナショナル・トラスト運動にヒントを得て、土地を買い取り守る運動を提唱しました。これが「しれとこ100平方メートル運動」です。

この運動は、一口8千円として募った寄付金をもとに開拓跡地を買い取り、開拓以前にあった本来の知床の森を再生するという壮大な事業です。1977年の開始以来、運動の趣旨に賛同する全国各地の方々から、たくさんの寄付が寄せられ、知床への思いを託されたこの運動は着実にその歩みを進めていきました。

「守る」から「育てる」へ

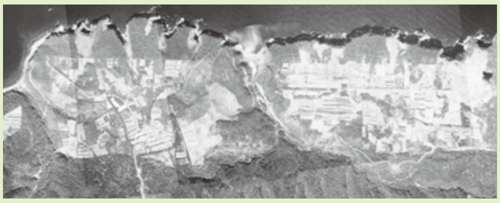
1997年3月には、残りの保全対象地を取得するために必要な寄付金が目標額に達しました。まだ一部の対象地の取得は残るものの、買い取り資金の目途がついたため、いったんここで区切りをつけ、運動は次なる目標へと進むことになったのです。ここまでの20年間で、この運動に寄せられた寄付は、4万9024件、約5億2千万円でした。

運動の第2ステージは、現在の「100平方メートル運動の森・トラスト」です（寄付金は一口5千円）。「森の再生」を大きな目標に掲げ、守られた運動地に、かつてあった本来の知床の森と生き物たちの営みを取り戻すための活動を日々行っています。そして、この森づくり作業と並行して、残る開拓跡地の取得に向けた交渉を継続してきた結果、2010年、最後の対象地の取得に至ったのです。

1977年の運動開始から2012年度末までに、全国から6万5000件の賛同者、総額7億9000万円を超える寄付をいただいています。

運動の発信拠点として

2010年に取得した運動地は、多くのビジターが訪れる知床自然センターや、運動に寄付をいただいた方々のお名前を掲示している「100平方メートル運動ハウス」に隣接していることから、森づくり作業の場としてだけではなく、運動と森づくりを伝える場所として活用していく方針です。そして、この一帯を、過去から未来へと続く知床の「夢」を語り継いでいく運動の発信拠点としていきます。



運動開始以前の開拓跡地の様子（1974年撮影）。写真の白い部分は、畑や牧場があった場所。

森林再生計画　原生の森と野生の営みを再生する

運動の森づくりは、森の憲法として「不変の原則」を掲げています。そして、この原則を遵守し、百年単位の長期的な目標に向けて、5年ごとの回帰作業、20年ごとの中期的な方針の確認と修正などを行いながら、原生の森と生き物たちの営みを取り戻すための活動を行っています。

不変の原則

「不変の原則」は、100年、200年後を見据えた森づくりの方針を立案するための**「森の憲法」**です。

- 植林木の生長によって余剰の樹木が生じても、運動地の系外への人為的な持ち出しは認めない。
- 自然に再生しつつある二次林では、森づくりのためであっても、大規模な森林構造の急変は行わない。
- 再生計画の実施にあたっては、国立公園および自然教育の場としての位置づけに配慮した森づくりを進める。
- ５年一巡の回帰作業方式をとり、過去の作業結果を評価するモニタリング調査を欠かさない。
- 作業計画の立案や見直しは、定期的に開催する専門委員会議に諮り、承認を得なければならない。
- 野生動物とその営みの再生にあたっては、遺伝子汚染を防ぐこと。減少種の回復は、現地の個体群からの増殖を基本とする。また、絶滅種の復元では、遺伝的にも地理的にも極力近い個体群からの再導入を原則とする。

長期全体目標（100～200年後）

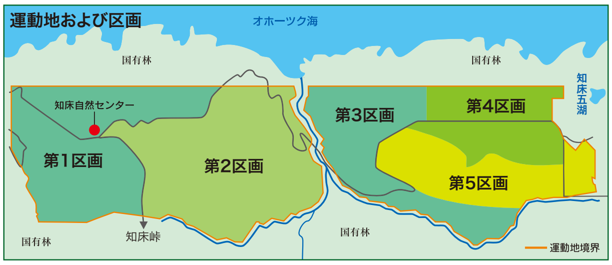
1）本来この地にあった原生の森を再生する。
2）本来的な野生生物群集と自然生態系の循環を再生する。
3）トラスト資産としての運動地の適正な公開と保全のシステムを構築する。

20年ごとの中期的な方針（2017年まで）

- 作業の前後にモニタリング調査を行うとともに、放置区を設けて再評価と計画の見直しに備える。
- 急増したエゾシカへの対応には、生態系の調整能力の活用を基本とするが、植生への著しい影響が避けられない場合は、個体数調整も含めて検討する。
※2007年改訂
- カラマツなど外来樹種については、森林再生の過程では活用するが、長期的には減少させる。

回帰作業方式

「不変の原則」に基づき、運動の森づくりは、運動地全体を5つの区画に分け、5年で一巡する回帰作業方式を取り入れています。この回帰作業を4巡した20年後に中期的な方針の確認を行い、さらに100～200年後の長期目標の達成を目指します。



第1次回帰作業（1998～2002）
↓
第2次回帰作業（2003～2007）
↓
第3次回帰作業（2008～2012）
↓
第4次回帰作業

2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度
第1区画	第2区画	第3区画	第4区画	第5区画

↓
中期目標の確認　2017年度
20年ごとに中期的な方針の見直し･修正
↓
長期目標の達成　100～200年後

森林再生専門委員会議

森林再生計画に基づく作業の方針や方向性は、動植物の専門家や地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論や検討が行われています。

森林再生専門委員会議

毎年開催している専門委員会議では、その年ごとの森づくりの成果の確認と課題についての議論が行われます。そして、その結果を踏まえ、翌年の森づくりの計画がこの会議の場において立案され、実行へと移されていきます。

各委員が、それぞれ専門の立場に立ち、様々な角度から議論が行われるこの会議は、運動の森づくりを進める中で、重要な役割を果たしています。数百年先の未来の森は、科学的な知見と古くを知る地元からの意見に基づきながら、その設計図が描かれています。この5年間では、計6回の会議が開催され、回帰最後の2012年の会議では、次期5年間の第4次回帰作業計画が立案されました。

森林再生専門委員（2012 年度末現在）

- ●石川　幸男　　弘前大学白神自然環境研究所 教授
- ●青井　俊樹　　岩手大学農学部共生環境課程 教授
- ●甲山　隆司　　北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授
- ●宇野　裕之　　北海道立総合研究機構環境地質研究本部 環境科学研究センター自然環境部 研究主幹
- ●日浦　　勉　　北海道大学苫小牧研究林 林長
- ●山崎　　猛　　運動推進本部 役員
- ●綾野　雄次　　運動推進本部 役員、知床自然保護協会理事

「知床世界自然遺産における 100 平方メートル運動の意味」

森林再生専門委員会議 座長　石川　幸男　（弘前大学白神自然環境研究所教授）

100平方メートル運動地において本格的に森づくりが開始されたのは1998年なので、15年が経過しました。皆さんもご存じのように、知床での森づくりは5年を作業の一区切り（回帰）としており、その都度、それまでの5年間での成果を振り返りつつ課題を整理し、新たな5年間に乗り出してきました。

今年は新たな第4次回帰作業期間に入る年に当たるので、昨年は今後の5年間の森づくりに関して議論しました。今から5年前の「森通信No.11号」（2008年6月発行）では、森づくりに際してエゾシカによる影響への対策が最も大きな課題だとお知らせしましたが、その状況は現在も大きくは変わってはいません。

しかし、この5年間では、運動地とその周辺では世界自然遺産管理に関連して、大きな動きがありました。そのひとつは、知床岬を主な舞台に世界自然遺産管理としてのシカの個体数調整が実施された成果を受けて、運動地においても2011年から捕獲手法の検討や試験的な捕獲が開始されたことです。その結果、昨年あたりから見かけるシカは目に見えて少なくなってきています。もちろん、シカが少々減ったからといって、すぐには森が復活するわけではありませんが、林床の植生などに回復の兆しが見えてきました。

またもう一点は、岩尾別川支流の赤イ川において砂防ダム等の河川工作物が林野庁と斜里町によって改修されたことです。こうした河川工作物は、森づくりの本来の目標である原始の生態系を復活されるために欠くことのできない、河川へのサケマス類の遡上を妨げていましたが、今後は遡上の復活が期待されています。

シカの捕獲も河川工作物の改修と撤去も、私たちの運動みずからが取り組める規模と範囲を超えています。とはいえ、その成果を判断するには、この地での森づくりと生態系再生も欠くことができないのです。

個人的なことで恐縮ですが、私は2011年春に北海道での短期大学勤務を離れて弘前大学に転職し、白神山地世界自然遺産に関わる調査研究に取り組むようになりました。弘前に来てみると、私たちの運動に類似した活動は、日本の世界自然遺産地域でほかに類例がないことを実感します。運動地の森づくりと生態系再生に取り組み、その状況を綿密にモニタリングすることは、世界自然遺産管理の面でも重要な意味があることなのです。

第4次回帰作業計画（2013〜2017年）

これからの5年間は、20年間をひとくくりにした第1次中期目標の最後の回帰となります。次の20年間、そしてその先の数百年間を見据えながら、これまで積み上げてきた経験と蓄積を活かして、知床の森を育て、伝え続けていきます。

「針広混交林の形成」

第3次回帰作業の結果から、針広混交林の形成に向けた作業として、アカエゾマツなどの針葉樹の植林地に広葉樹の大型苗の移植する手法が有効であることが分かりました。第4次回帰作業では、この手法を中心に森づくりを行っていきます。

「エゾシカ対策」

第4次回帰作業時も、運動地を含む幌別・岩尾別地区でのシカの捕獲（「密度操作実験」）が引き続き行われる予定となっています。これによりシカが植物へ与える影響が低下していくことは予想されますが、シカの低密度状態がどの程度維持されるかなど、その動向はまだ定まったものではありません。よって、今後も一定の数のシカがいることを前提とし、この5年間についても、防鹿柵や樹皮保護ネットなどの「防御的手法」を継続して作業を行っていきます。

「モニタリング」

これまでのモニタリング結果を検証し、次の20年間の中期目標の立案に向け必要な項目の洗い出し作業を行います。また、シカの捕獲に関連して、環境省が実施するモニタリングの結果を注意深く見守り、運動として必要な連携を図っていきます。

「生物相復元」

今後もサクラマスなど魚類を中心とした取り組みを進めていきます。また、岩尾別川の河川環境の改善に向けた作業も引き続き実施していきます。これら取り組みについては、北見管内さけ・ます増殖事業協会や知床世界自然遺産科学委員会とも十分な連携を図りながら進めていきます。

「交流事業」「運動地公開」

これまで通り、「知床自然教室」や「森の集い」などを継続して実施します。また、運動地公開の一環として、合宿型のイベントを開催する他、学校や企業などの受け入れを行っていきます。特に2010年に取得した運動地での普及に向けた取り組みに力を入れていきます。

知床自然センター隣接作業地での取り組み

知床自然センターに隣接する運動地(2010年取得地)では、森づくりと公開に向けた取り組みを進めています。2012年には、防鹿柵とそこに至る作業道を設置しました。

今後は、柵内外への大型苗の移植などを行う予定です。また、森づくりの発信拠点として、伝えるための仕組みづくりにも取り組んでいきます。

2012年に設置した防鹿柵。面積は約2ヘクタール。知床自然センターから歩いて5分にあるこの場所を森づくりを伝える場としていく。

芽吹いたばかりのオヒョウの若葉。苗畑の木々が葉を開く頃、森づくりの1年も本格的にスタートする。シカが好むオヒョウの木を、柵の外で見ることはほぼなくなった。そんなオヒョウの木々が、再び知床の自然の中で命を育む日が来ることを夢見て森づくりを進めている。

2012年度の事業決算

活動資金の決算をご報告します

100平方メートル運動の活動資金は、「国立公園内森林保全基金」として斜里町が管理し、この基金と町の一般財源をもとに、森づくりや交流事業などを実施しています。

2012年度は、事業費として総額2623万円を支出しました。その内訳は、森林再生業務委託費1169万円と、ダイキン工業株式会社様からご支援をいただいて実施した岩尾別川再生事業委託費580万円が主なものです。また、事務費として「しれとこの森通信」や、通信発送用封筒などの印刷製本、受付事務員の賃金、運動35周年記念事業などの費用に650万円を支出しました。

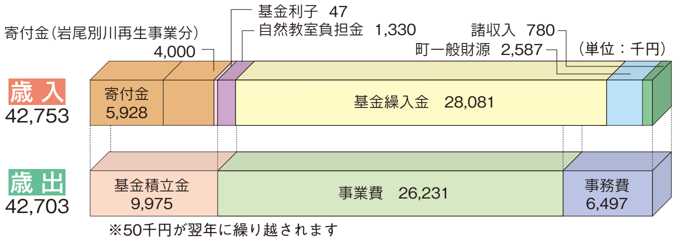
なお、2012年にいただいた寄付金は、一度運動の基金に積み立て、2013年度以降の活動資金として活用していきます。

■国立公園内森林保全基金の状況

（単位：千円）（2013年5月31日現在）

		国立公園内森林保全基金		
		2011年以前	2012年	計
歳入	寄付金	788,263	9,928	798,191
	利息	69,602	47	69,649
	計	857,865	9,975	867,840
歳出	事業費	651,348	24,901	676,249
	事務費	117,036	3,180	120,216
	計	768,384	28,081	796,465
残高		89,481	△18,106	71,375

■2012年度決算の内訳



※50千円が翌年に繰り越されます

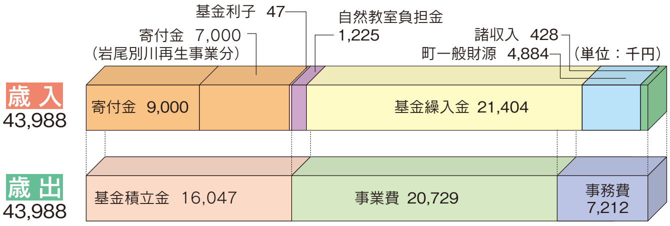
2013年度の事業予算

活動資金の予算をご報告します

2013年度の総事業費は、約4399万円を予定しています。歳入は、これまで積み立ててきた運動の基金から2140万円、町の一般財源から488万円を繰り入れるほか、寄付金の目標額として1600万円、その他に170万円を見込んでいます。

歳出は、森づくり事業などの現地業務の委託費に1190万円、運動地を流れる岩尾別川の自然再生事業に842万円など2073万円を事業費から支出します。また、事務費として「しれとこの森通信」や運動パンフレットなどの印刷・発送費用に388万円、受付事務員の賃金177万円など721万円を支出予定です。

■2013年度予算の内訳



2013年度の主な森づくり作業

幌別台地の第1区画（P.16参照）を中心に作業を行います。苗畑での広葉樹の苗木の育成や大型苗の移植、防鹿柵の補修などを進めます。また、3年目となる岩尾別川の復元事業の一環で、河原に防鹿柵を設置する他、2010年度に取得した運動地内での公開に向けた取り組みを行います。

知床トピックス
この5年間の知床の大きな話題

延長された高架木道から見る湖と知床連山。この木道からは運動地も一望できる。

知床五湖

「二つの五湖」知床五湖の新しい歩き方

知床五湖は、知床で最も多くの方が訪れる人気スポットです。しかし、長年に渡り懸案となっていた課題もありました。利用時間の集中による混雑や植生への影響、ヒグマの出没による危険性の増加、それに伴う遊歩道閉鎖の頻発などです。

これらを解決するために、2011年5月より、自然公園法の利用調整地区制度を柱とする新制度が始まりました。新制度のコンセプトは「二つの五湖」。1つ目のルートは、安全でいつでも利用できる高架木道。どなたでも短時間で雄大な風景をご覧いただけます。もう一つのルートは、これまでもあった知床五湖を巡る地上の遊歩道ですが、ヒグマのリスクを避け、そして、静かに自然を満喫するために、散策前のレクチャー受講が義務付けられました。また、ヒグマの活動が活発な時期は、ガイド同行が必須のルールが加わります。知床五湖を訪れる方は、希望に応じて「高架木道」または「地上遊歩道」いずれかのルートを選択する、という考え方です。

新制度は、2013年で3年目を迎えます。この間、10万人以上の方がレクチャーを受けて地上の遊歩道を歩きました。最近は、知床五湖以外の遊歩道でも、レクチャーで伝えている「ヒグマに出会わないための声かけ」が聞こえてきて、知床五湖で周知するルールが利用者に浸透してきているのを感じます。

ぜひ、皆さん、「二つの五湖」を訪れてみませんか！

知床五湖フィールドハウスでレクチャーを受け、地上遊歩道へ出発する。詳細は下記HP参照。

知床五湖　～二つの歩きかた～
http://www.goko.go.jp/

ヒグマ

知床のヒグマ事情

この数年間でも、しばしば知床のヒグマの話題が全国ニュースを騒がせました。

2010年の10月には2頭のヒグマが斜里市街地の中心部を闊歩（かっぽ）する事件がありました。市街地にある斜里町役場の庁舎の窓からヒグマが目撃されたのは、年間数百件のヒグマ目撃情報がある斜里町でも初めてのことでした。

2012年の8月には、激しく痩せこけたヒグマの報道もありました。山の実りの不作に加え、夏場の重要なエサであるカラフトマスの遡上が1ヶ月近く遅れるなど、複数の原因が重なり、ヒグマにとって厳しい夏であったようです。そのせいか、昨年の斜里町でのヒグマ目撃件数は前年の2倍以上、過去最多の1768件となりました。

そんなニュースの裏側で、人とヒグマが共に暮らし続けるための地道な試みも続いています。2012年には、3年間の検討の末、「知床半島ヒグマ保護管理方針」を策定しました。また、2013年には、これまで斜里町や環境省、知床財団などが取り組んできた啓発活動を、地元の有志や観光協会などとの協働による新たな展開として、「知床ヒグマえさやり禁止キャンペーン」が始まっています。

これからも、知床では、人とヒグマがともに歩む道を探るための様々な試みが続きます。

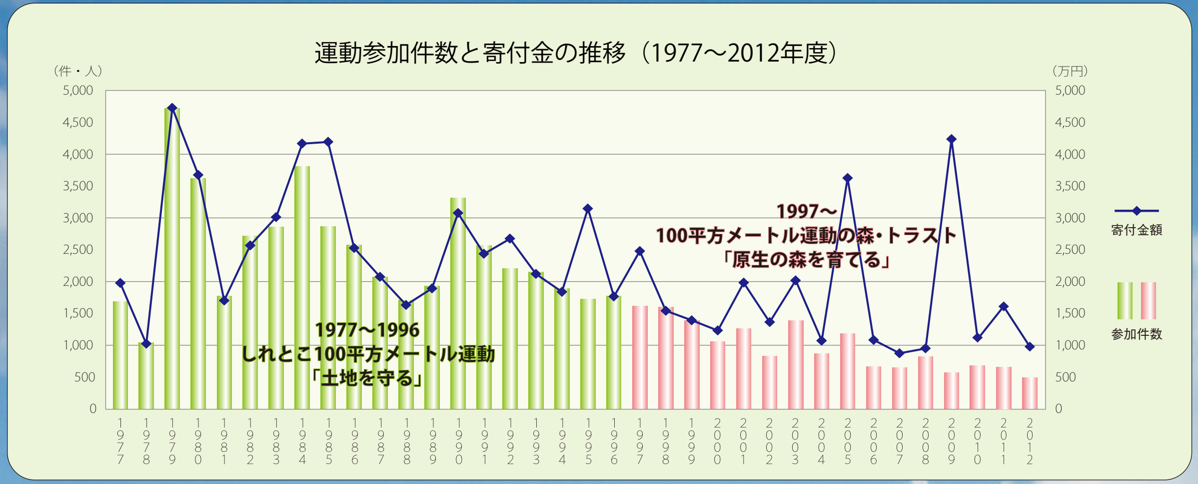
斜里町の市街地に出没した2頭のヒグマ。この通りは、飲食店が立ち並ぶ繁華街。

「知床ヒグマえさやり禁止キャンペーン」

一度ヒグマが人間の食べ物の味を覚えてしまうと、しだいに人前に現れるようになり、観光客や住民を危険にさらすことになります。人とクマの共存を目指す知床では、観光客によるえさやり行為をなくすための啓発キャンペーンを展開しています。

STOP!えさやり

http://shiretoko-whc.com/esakin/



知床の森づくりは、皆さまに支えられています たくさんのご支援をありがとうございました

本格的な森づくりが始まって 15年間、多くの皆さまから様々なご支援をいただきました。2008～2012年の第3次回帰作業の5年間で、3,235人の皆さまからいただいたご寄付は8,900万円にもなります。

ダイキン工業㈱様には、2011年より、岩尾別川の自然再生のための資金や社員の皆さまが実際に作業に関わるという人的なご支援もいただいています。

㈲グリーンコップ様には、森づくり開始当初から樹皮保護ネットを無償でご提供いただくなどのご協力を受けています。

愛知県の㈱友和製作所の従業員の皆さまからも毎年継続した寄付をいただいています。

2009年には、静岡県在住の方からは、亡くなられたご家族の遺志として、知床の自然保護のためにと3000万円ものご寄付をいただきました。その他、お子様の誕生や還暦のお祝いなどにメッセージを添えてご寄付をくださった方など、全国各地の皆さまからも多大なご支援をいただいています。

様々な形で、知床の森づくりを支えていただいた皆さまに、ここに改めてお礼を申し上げます。ありがとうございました。そして、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

運動参加（寄付）のお願い

「100平方メートル運動の森・トラスト」は、運動参加者の皆さまからの毎年の寄付金によって支えられています。
引き続き、あたたかいご支援をよろしくお願いいたします。

寄付をいただいた方に募金証書をお送りします。メッセージを添えて、ご家族・ご友人へ贈るプレゼントにもおすすめです。

寄付金

一口：5,000円

寄付の方法

振込の場合

1. 申込書に必要事項をご記入の上、郵送またはファックスで斜里町役場へ送信してください。
2. 申込書付属の払込取扱票もしくは下記口座まで寄付金をお送りください。

   口座記号番号：０２７４０－８－１０５５５

   加入者名：斜里町役場

   ※郵便局以外の金融機関からお振込みを希望される場合は、お問合せください。

現金書留の場合

申込書を同封の上、現金書留を斜里町役場にお送りください。

控除制度について

運動への寄付金は、所得税および住民税の控除制度（ふるさと納税）の対象となります。

- 所得税は、課税対象額から寄付控除を受けることができます。
- 住民税は課税額から寄付控除を受けることができます。
- 控除の対象となるのは、2,000円を超えるご寄付です。

■お問い合せ先

〒099-4192
北海道斜里郡斜里町本町12番地
斜里町役場　環境課　自然環境係
TEL : 0152-23-3131（内線100）　FAX : 0152-23-4150
MAIL : 100m2@town.shari.hokkaido.jp

「しれとこの森通信」のバックナンバーはこちらから。
「100平方メートル運動の森・トラスト」ホームページ
http://www.town.shari.hokkaido.jp/100m2/

募金証書を入れる新しい額縁ができました。

ミズナラフレーム　3,500円（税込、送料別）

「100平方メートル運動の森・トラスト」の募金証書を入れる額縁について、これまでの市販のものに加え、特製の額縁（フレーム）が仲間入りしました。使用している木材は、オホーツク地域のミズナラで、製材所で規格外となった材を加工して作られています。また、製作は、地元斜里町に工房をかまえる「ビヨルン クラフト＆デザイン」にお願いをしています。

額の正面には「The Shiretoko 100m² Movement」の焼印を押してあります。塗装は木質を活かすオイル仕上げです（表面はアクリル製）。　＊イーゼルは含まれません。

■「ビヨルン クラフト＆デザイン」　Björn Craft ＆ Design

ビヨルンとはスウェーデン語でヒグマを意味しています。製作者の中西将尚さんは、知床財団で長年に渡りヒグマの保護管理に関わった経歴の持ち主です。現在は、木工家として道東の自然を語りたくなるようなクラフト作りを行っています。
「ビヨルン クラフト＆デザイン」　http://bjorn.exblog.jp/

平成25年(2013)6月20日発行　発行：斜里町役場総務部環境課自然環境係　〒099-4192　北海道斜里郡斜里町本町12番地　TEL：0152-23-3131(内線100)　FAX：0152-23-4150

2013年度の活動予定　イベント＆ボランティア

知床の森づくりカレンダー

知床の森づくりの一年間。数百年先の未来の森を夢見て、日々さまざまな取り組みを行っています。

イ イベント　ボ ボランティア募集日

NATIONAL TRUST The Shiretoko 100m² Movement

春の森づくり

本格的な森づくりの始まりは５月の連休明けからです。雪解けを待って、苗木を育てている苗畑での作業を開始します。芽吹きまでの数週間、植樹や大きな苗の移植、秋の植樹用の苗木の準備など大忙しです。

5月

- イ 10日(金)～14日(火)「第9回 知床森づくりの日・春」＊終了
- ボ 23日(木)～25日(土)

17～20日：第4回ダイキン知床ボランティア＊終了

6月

- ボ 7日(金)～9日(日)
- ボ 14日(金)～16日(日)

*15日(土)：知床自然センター隣接作業地草刈りボランティア
19～20日：都立南多摩中学校研修旅行森づくり体験

夏の森づくり

苗畑では雑草が一気に草丈を伸ばし、除草作業に追われます。この他、各地の防鹿柵の補修や岩尾別川の復元事業、運動地内の川に帰ってくるサクラマスの産卵状況を確認する調査なども行います。

7月～8月

- イ 7月30日(火)～8月5日(月)「第34回 知床自然教室」
- イ 8月23日(金)～27日(火)「第10回 知床森づくりの日・夏」

9月

- ボ 6日(金)～8日(日)
- イ 20日(金)～24日(火)「第11回 知床森づくりの日・秋」

12～15日：第5回ダイキン知床ボランティア
25日：斜里高校課外授業「自然教育概論」

10月

- ボ 4日(金)～6日(日)
- ボ 11日(金)～13日(日)
- ボ 18日(金)～19日(土)
- イ 20日(日)「第17回しれとこ森の集い」

11月

- イ 10月30日(水)～11月4日(月)「第17回 森づくりワークキャンプ」

中旬：
(1日目)森林再生専門委員による現地視察
(2日目)2013年度森林再生専門委員会議

秋の森づくり

秋も植樹や苗木の移植に適した季節です。冬を目の前にした最後の季節、ボランティアの皆さんとともに、苗木の植樹や岩尾別川河畔でのシカ柵づくりなど秋の森づくりは、雪で道が閉ざされるまで続きます。

2014年1月

- ボ 18日(土)～19日(日)
- ボ 25日(土)～26日(日)

下旬：
冬季の運動地公開「スノーシュー・歩くスキーコース」オープン(～3月中旬)

2月

- ボ 1日(土)～2日(日)
- ボ 8日(土)～9日(日)
- ボ 15日(土)～16日(日)
- ボ 22日(土)～23日(日)

冬の森づくり

冬、運動地周辺は、エゾシカの越冬地となります。シカの冬のエサとなる木々を守るため、保護ネット巻きを行います。また、スキーコースの設置や看板作製なども冬の仕事です。

2013 大募集　「知床のために」が合言葉！

イベント参加者募集！

知床の森づくりには、あなたの力が必要です。ぜひ、イベントやボランティアにご参加ください。皆さま、お待ちしています！

第34回 知床自然教室

- ●日　程：7月30日(火)～8月5日(月)　6泊7日
- ●対　象：小学校4年生～高校3年生
- ●定　員：40名(先着順)
- ●参加費：35,000円(別途、現地までの交通費)
- ●申　込：7月5日(金)まで

全国から集まる仲間とともに、知床の森で暮らす一週間！

知床森づくりの日

- ●日　程：(夏) 8月23日(金)～27日(火)　4泊5日
  (秋) 9月20日(金)～24日(火)　4泊5日
- ●定　員：12名(18歳以上)
- ●参加費：16,000円(宿泊・食費等込)
- ●申　込：各開催日の2週間前まで

知床の森で4泊5日の森づくりを体験しませんか！

第17回 しれとこ森の集い(植樹祭)

- ●日　程：10月20日(日)
- ●参加費：無料

※こちらの参加申込み等は斜里町役場まで
【斜里町役場自然環境係】
TEL：0152-23-3131　FAX：0152-23-4150

午前中は森歩き、午後は植樹祭。秋の知床を満喫する1日です！

第17回 森づくりワークキャンプ

- ●日　程：10月30日(水)～11月4日(月)　5泊6日
- ●対　象：18歳以上
- ●定　員：15名(先着順)
- ●参加費：18,000円(宿泊・食費等込)
- ●申　込：10月14日(月)まで

森の番人指導のもと本格的な森づくりに打ち込む6日間！

イベント・ボランティアの参加申込み・お問い合せはこちらまで。
「公益財団法人知床財団　自然復元係」TEL：0152-24-2114　MAIL：info@shiretoko.or.jp

詳しくは知床財団HPで！　知床財団 ▶ で検索！

発行：斜里町　編集：公益財団法人 知床財団　印刷：有限会社 斜里印刷